

春燈

2018 February

2 月号



主宰の句

安立公彦

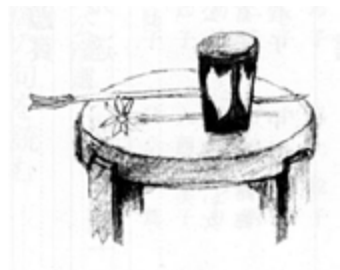
漱石忌全集いまも書架を占め

漱石賞なき文壇や空つ風

落葉踏む山路やこころ和みゆく

曾遊の目吹の里や一茶の忌
(野田市目吹)

遙かにも眠る筑波や年は逝く



久保田万太郎の句

二階からみて山茶花のさかりかな

『流雷抄』昭和二十二年

あたかも舞台を見ているようである。

二階から見た山茶花は、いつそその紅色が重なって華やかであつたらう。

そして、周りに散り敷く花びらが裾模様のように広がり、美しかったであらう。

ふだん目にする山茶花ではなく、俯瞰しているこの光景に意外性があり面白いのである。

沼田桂子

久保田万太郎の句

獅子舞やあの山越えむ獅子の耳

『冬三日月』昭和二十二年

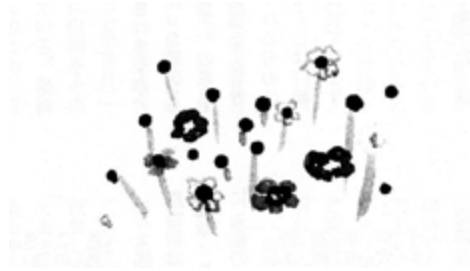
それまで賑やかに囃していた鉦や太鼓がはたと鎮まり、
笛が「江戸の子守唄」を奏で始めた。へねんねんころり
よおころりよ……あの山越えて里へ行つた……

激しい動きをしていた獅子も、たちまち緩やかに首を
低く落とし、とろとろと眠りにおちてゆく仕草をする。
獅子は夢の中で山を越え、郷里へ向かったのだらう。

と、耳がヒクツと動いた。母親の声が聞こえたのだ。

片山博介

燈下集



○ 西岡啓子

より添うて千本公孫樹秋澄めり
相輪の空に映ゆるや文化の日
空仰ぐならひ今もて冬銀河
小春日や回してみたる万華鏡
冬ぬくし本屋に少し長居して

○ 中村紀美子

つぎはしと仮名文字美しき冬はじめ
真間川の流れかはらじ白秋忌千葉大念句
音もなき雨に目覚むる今朝の冬
小春日や赤い鼻緒の祢宜の妻
句の友の栄えある賞や実千両祝・平沢様

○ 浅木ノエ

色鳥や楊貴妃観音満願日祝・卒寿 京都五句
水音の御寺の釣瓶落しかな
菊膾卒寿の箸の美しく
暮の秋母呼ぶ父の声老いぬ
父母と姉妹に更けて紅葉宿

○ 渡辺若菜

大根煮る匂あふれて恙なし
しぐるるや母の袖の藍深し
母が焼くホットケーキや冬日和
大根を引くたび尻餅つく園児
故里の交はり淡し冬紅葉

○ 藤丸 誠 巴

虚しきも盈つるも抱き山眠る
病篤き友をおとなふ枇杷の花
野沢菜を洗ふ水場の艶ばなし
虎落笛しきりと妻の夢を見き
物枯るる音のしげき霜の夜

○ 懸林 喜代次

大文字山の頂に立ち秋惜しむ
歳時記の葦編つくろふ夜長かな
小春日と二言のみの日記帳
ナガオカのレコード針も針供養
いささかの餅と酒買ふ年用意

○ 豊谷 ゆき江

束の間の日差し大事に蒲団干す
指差して火元確認日短
帰りの遅き子を待つ暇や大根煮る
貸し借りの出来る隣や千歳飴
捨てられぬ禿びし鉛筆一葉忌

○ 赤岡 茂子

猫じやらし風と戯る放水路
風の意に操られぬる猫じやらし
放水路猫に土産の猫じやらし
遠近の人招きぬる猫じやらし
自転車を手手に寝かせて秋惜しむ

○ 後藤 眞由美

太陽のスポットライト帰り花
鯛焼の開きてふあり買ひにけり
鬼瓦のまじろみ誘ふ小春かな
小雪と知るや知らずや風騒ぐ
遠吠えの尾の震へをる霜夜かな

○ 川崎 真樹子

冬帝のごとりと席を立ちにけり
風呂敷をほどき蜜柑を解き放つ
兎飼ふ女無糖のアルグレイ
夫の手に剥かれ細身の冬林檎
むささびの夜を仮眠のナースかな

○ 木村 梨花

茶の咲いていつもの路地を樂しめり

八一忌の風にあらがふ雲ひとつ

誰か過ぐ障子の影や一葉忌

野良猫に声かけらるる漱石忌

小春日やまぶた重たき阿弥陀仏

○ 溝越 教子

子には子の守るくらしや初時雨

八手咲くルビ―婚にて終はりけり

萩刈るや吹つ切るものの二つ三つ

なるやうになるさと大根洗ひけり

哀調の童謡うたふ冬夕焼

○ 齋藤 晴夫

銀漢の渚の果ての離れ星

短日の入日に寄する願ひあり

山茶花の花の白さを不思議とも

硝子戸に枯蠅の影のあり

緊々と老いの身過ぎや日短

○ 坂入 妙香

漱石の世界に浸る小春かな(漱石山房四句)

ペルシヤ絨毯の褪せぬ彩り漱石忌

直筆の文字のくづれや冬初

漱石山房回廊冬日集めけり

煮るほどにおでん膨らむ夕餉かな

○ 河崎 國代

鳥渡る我閑せずの鴉かな

水底に逆さ紅葉の神秘めく

年忘れ忘れてならぬ一言あり

茹で玉子つるり殻剥け御慶かな

人並に短日かこつ閑人かな

○ 上野 進

木枯に揉まれし藪の呻きかな

四阿に憩ふ膝へも朴落葉

雪吊りの松のそれぞれ背伸びして

毛糸編む孫へ思ひを綴ること

濯ぎもの預け北風喜ばす

余言

安立公彦

母の世の日向のほひ干蒲団 佐藤 信子

冬になると、日当りの好い物干しや手摺に、蒲団の干し
てある景を良く見る。夜に入り床に就くと、温かみの残る
蒲団は安らかな眠りを誘う。

この句、その干蒲団の温みに、「日向のほひ」を感じ
るといふ。それは誰しも思うところだが、更にこの句には、
その「日向のほひ」に、「母の世の」という懐旧の情が、
しかし然りげ無く添えられている。ここに来て単なる日常
の用務が、深い思いを持つ言葉となる。俳句は表現詩であ
る。この句にその優れた一つの例を見る。

うすうすと日の差してゐる帰り花 松橋 利雄

初冬の頃、日差しの善い垣根に、つつじ等の帰り花の咲

いているのはいい眺めだ。歳時記を見るとこの季語には二
つの呼称がある。「帰り花」と「返り花」だ。俳人はどう
表記しているか。芭蕉や一茶、子規や虚子等は前者、素十
や風生、林火等は後者（日本大歳時記）。参考までに、万
太郎は後者（全句集）。敦は一句ずつだが、へ帰り花兄妹睦
びあひにけりゝの方が善い。私も前者を用いている。
掲句。初冬の季節が善く表現されている。上五から中七
に移る語感が、みごとに「帰り花」を包んでいる。

かくもよき文化を遺し水澄めり 三上 程子

去る十一月三日に催された「千葉支部市川大会」での作
品。市川は周知の通り、東京と江戸川一つを挟み隣り合っ
ている。古来相互の往き来は多かった。その一つが、弘法
山に到る参道の「真間の継橋」。遠く万葉集の東歌に載っ
ているという歴史のある地だ。手許に『房総文学散歩』と
いう本がある。頁を開くと、市川周辺に縁のある作家の名
が並ぶ。白秋、荷風、谷崎、露伴、五木、三島等々。夫ぞ
れの残した作品は貴重な。郭沫若の亡名中の家もある。

この句の、「かくもよき文化」は、深い歴史に沿う充実
の内容を持つ地への挨拶である。ゆつくりと再訪したい。

冬浅し心に詩あるものの幸 鷹崎由末子

この詩（うた）は、短歌、俳句、詩など、音律のある所

謂「詩」を指す。短歌を爲す人たちは短歌の世界を、現代詩を作る人たちはその世界を、いつしか「心」の拠り所とする。もとより俳句に於いても同様である。

この「詩」は、まず自身の思いであるということ。常に前向きであるということ。それが適って初めて、「心に詩あるものの幸」と言い得る。初冬の晴れた日、俳句というものの有り様を反芻する作者の姿が見えて来る。

平成の終はる日決まる小春かな 小張 昭一

「平成」の年号が決まったのは、昭和六十四年一月八日だった。語源は、書経の「地平天成」、史記の「内平外成」に因るとある。永い昭和の時代との訣別を、全ての人が深い思いで諾った日は、つい先日のことのようだったが、以来三十年を経たのだ。

平成三十一年四月三十日を以て「平成」は終わる。多難な時代だった。そして「昭和は遠くなりけり」の思いのみが残る。作者の「小春かな」に寄せる思いは深い。

散会すひとりひとりに月ひとつ 近藤 牧男

夕方から始まった句会も終わり、その後、駅前のいつもの店での充実したひと時も果てた。帰路は電車に乗る人バスで帰る人、歩いて行く人も居よう。そういう経験を積みつつ、人は俳人として成長する。そういうところにも、

俳句のこのころの一面は存在しよう。

この句、帰りゆく人はそれぞれ今日の句会を振り返っている。その独りひとりを晩秋の月は明るく包む。この作者独特の調べが、読む人に納得の思いを抱かせる作品だ。

荷風旧居白壁に秋惜しみけり 岩永はるみ

この句、千葉支部市川大会で特々選に戴いた作品。荷風を語る時、市川は外せない。市川の観光地図には、荷風の歩いた路を、「荷風ロード」と記している。大会の朝、私は平沢恵子、臼井さゆりの二人の案内で荷風ロードを歩いた。何とも懐かしい思いのする荷風ロードだった。

この句は荷風終焉の地での作。細い路地に入り堀越しに見る荷風旧居は年月の痕跡に包まれていた。作者はそういう永井荷風を偲びつつ、逝く秋を惜しむのだった。

小春日や学生街の楽器店 田嶋 洋子

お茶の水での作か。本部句会の会場とは逆に、小川町へ下る街筋には楽器店が多い。道の向う側には、明治大学や山の上ホテルが並ぶ。聖橋とはまた異なる街の風景だ。

小春日のひとつ日、そういう街の中に身を置く作者。「学生街の楽器店」が、若々しく清潔だ。作者もいつしか遙かな昔日に思いを委ねる。「小春日」に相応しい作品だ。

当月集

安立 公彦選



○ 河本由紀子

卒寿祝ふ次もあれかし冬の虹
お喋りに耳を預けて蜜柑剥く
黄葉並木かつて名画の一シーン
雪女のお高祖頭巾は濃紫
今日よりは師走と逸る主婦氣質

○ 佐藤玲子

肩書のなくて身軽やほうせん花
捨てられぬ夢や夜学の灯のともり
月光を静かに浴ぶる破蓮
虫の音のいよよ深める四更かな
晴れやかや菊大輪となる朝(祝・春皇薈)

○ 永井恵子

山嶺に白き雲わく新松子
村口の銀杏大樹や黄落す
紅葉狩深紅のスカート首に巻き
目を欲りて紅葉傾く山路かな
冬麗や薔薇に囲まれ誕生日

○ 持田信子

雨戸引く今朝も元氣よ石路の花
川涸るる鳥待つ望遠レンズの列
白秋の小径に続く蜜柑山
すり足で歩む霜夜の長廊下
野良猫と呼応するかに虎落笛

春燈の句

安立 公彦選

人生に取捨の神あり冬に入る

東京 吉田とよ子

天と地に遊ぶ心や小六月

故郷へ入港テープ初時雨

胸に沁む情の一字草の花

冬ざれの海神祀る岬かな

花八手鼠返しの蔵古りぬ

野仏の供華新しき刈田中

体ごと笑ふみどり児小春かな

門前のそば屋満席菊日和

霜の夜の机の疵を愛しめり

澆き水の濁りを掻くや笹子鳴く

図書館は老人天国冬ぬくし

柵の匂ふ門さき竹箒

霜の葉の淋しさよぎる朝かな

兵庫 秋山 薫

兵庫 古川 幸子

東京 古谷 昌女

テーブルに蜜柑二つと歳時記と

風呂焚の薪積みあぐる霜日和

床の間の草間弥生絵冬茶会

遠富士や大観覧車冬空に

折込みのめつきり多き年の暮

喪主の名にも馴るるこの頃年暮るる

退院のまだゆるされず小夜時雨

冬天を燃ゆる太陽登りゆく

冷たき手つないでくれし父なりけり

なつかしき昭和の歌や冬雲雀

菊の香に灯して早も七七忌

寒菊や泪納めの忌も近し

冬帽子柩に納む波音も(妹逝く)

嶺岡山に落つる夕日や冬深む

千葉 鶴岡 紀代

東京 山口 地翠

神奈川 犬嶋テル子



